〔千葉医学 56，227～228，1980〕

〔学会〕

第621回　千葉医学会例会
第33回　千葉泌尿器科集談会

日　時：昭和55年1月20日
場　所：千葉大学医学部附属病院第2講堂

1.　腺性膀胱炎の1例

戴　東風，石川堯夫（国立千葉）
原　　繁（船員保険病院）

34歳，女，初診，昭和53年11月19日。主訴，蛋白尿。家族歴，特記すべきことなし。既往歴，昭和24年左変形性股関節症に罹患し，昭和41年左人工骨頭置換術を施行。その際，尿所見では異常がなかった。現病歴，昭和53年9月頃，千葉市の健康診断で蛋白尿を指摘された。膀胱鏡検査では，尿混濁著明，粘液多量を含み，膀胱粘膜は強い混濁，所々に充血を示し，肉柱形成はない。両側側壁が梢々隆起。膀胱生検による組織的所見では大腸粘膜ににた腺構造を示す。悪性所見がない。

2.　尿管結石を伴なった尿管瘤の1例

嘉川宗秀，遠藤博志（松戸市立）

症例は，33歳，女性で，腎盂腎炎の既往があるが，数年前より肉眼的血尿と小結石の自然排出がときにみられ当科を受診した。膀胱鏡的に拇指頭大の腫瘤が右尿管口部に見られ，IVP では Cobra-head 像と Halo-sign 及び右の上部尿路の拡張が見られ尿管瘤内と右尿管下部に結石が多数存在した。経尿道的尿管瘤切除術を施行したところ，結石の完全排出をみたが，軽度の VUR が出現しており，今後も経過観察が必要と考える。

3.　尿管外傷の1例

山城　豊，外間孝雄（国立習志野）

症例9歳男子。昭和53年8月18日歩行中乗用車にはねられた。頭部外傷，左大腿骨々折，血尿出現した。骨折治療後脳外科入院。受傷翌日の DIP で左腎盂尿管移行部より造影剤の溢流像が認められた。保存的方法にて経過観察していたが受傷後14日目より左側腹部痛及び左側腹部膨隆してきたため当科転科。受傷後41日目手術施行。後腹膜腔より混濁尿 600 ml 吸引，左腎盂尿管移行部に損傷部位を確認したが炎症が強度で左腎摘除術を施行した。自験例は本邦17例目の外傷性尿管損傷と思われる。

4.　骨盤腎の1例

片海善吾，丸岡正幸，瀬川　襄（厚生中央）

症例52歳女性，右下腹部腫瘤，反覆性膀胱炎にて IVP 施行，右骨盤腎を疑い精査目的にて入院。R-P にて右腎盂は前方を向き尿管は短くだ行拡張はない。A-G にて左右総腸骨動脈下にネフログラムを認め，腹部大動脈下部総腸骨動脈分岐部直上右側よりと，分枝部直下の左総腸骨動脈外側よりの計2本の動脈を持つ骨盤腎と診断した。

5.　水腎に合併せる milk of calcium renal stone の1例

片海七郎，森偉久夫（君津中央）
宮内武彦（県がんセンター）
山口邦雄（千大）

症例：43歳，男性

1978年6月人間ドックにて右側腹部に腫瘤を指摘され当科を受診。精査の結果，右尿管結石による水腎に合併せる milk of calcium renal stone，左尿管結石，左腎結石の診断を下した。左尿管切石術施行後経腹的に右腎摘除術を施行す。結石の分析結果はすべて燐酸カルシウムであった。術後経過良好なり。milk of calcium renal stone について若干の文献的考察を行った。

6.　治療法の選択に迷った腎外傷の1例

安藤　研，並木徳重郎（千葉労災）

16歳，男。交通事故で左腰部打撲，肉眼的血尿出現し当科緊急入院。DIP 等の所見より，後腹膜血腫を伴なう左腎破裂と診断，保存的対症療法を続けたが，左腎下3分の1は無機能，上3分の2は水腎症となり，受傷後約70日目に左腎摘施行した。本例程度の腎外傷には保存的治療を行なうのが，最近の趨勢であるが，本例の場合